

「子供の夢」——新谷純太

社会福祉法人アトバンク
 障害者アートバンク
 「障害者アートバンクは、障害者の作品を広告
 媒体に貸し出す芸術ライブラリーです」

日本人は「勤勉」で 「働きすぎ」なのか

◆加藤哲郎×小池和男×宮田登

日本人の「勤勉」の象徴・三宮金次郎像の謎を解く

Reportage The World ⑧

勤勉の象徴・三宮金次郎像は、今・高梨充

目次

遠く風景(近く風景) 6
セピア色の写真 諸井薫

座談会 ― 日本語を説く

4
日本人は「勤勉」で「働きすぎ」
なのか ― 昔の日本人は遊び上手
加藤哲郎×小池和男×宮田 登

12
日本人のなまけ者の系譜に再評価を
米山俊直

人クロースマップ

22
奥城良治「セールスカウンセラ」
野中恭太郎

essay

16
「国字」の誕生 ―
肉体労働を評価した日本人
濱口富士雄

21
家事労働は貨幣換算できる？
篠塚英子

24
「過労死」予備軍を抱える日本の社会風景
岡村親直

25
Welfare State
労働生産性の国際比較

野村信廣

31
Regulation in the Market
勤勉の象徴:
三宮金次郎像は、今
高梨 充

諸国巡行雑感(行) 一 五

17
福井県

藤森照信×増田彰久

35
日用品映像館
柏木 博

Telecommunications

26
マルチメディアサービスの早期実現を
狙うNTTのVI&P総合実験
三十キロメートルを超える
市外通話料金を大幅値下げ

「NTTの労働現場」

30
第七回NTT社外ふれあいトーク大賞に入選作 小学生部門
木になったお兄ちゃん(と私) 齋藤友嘉里

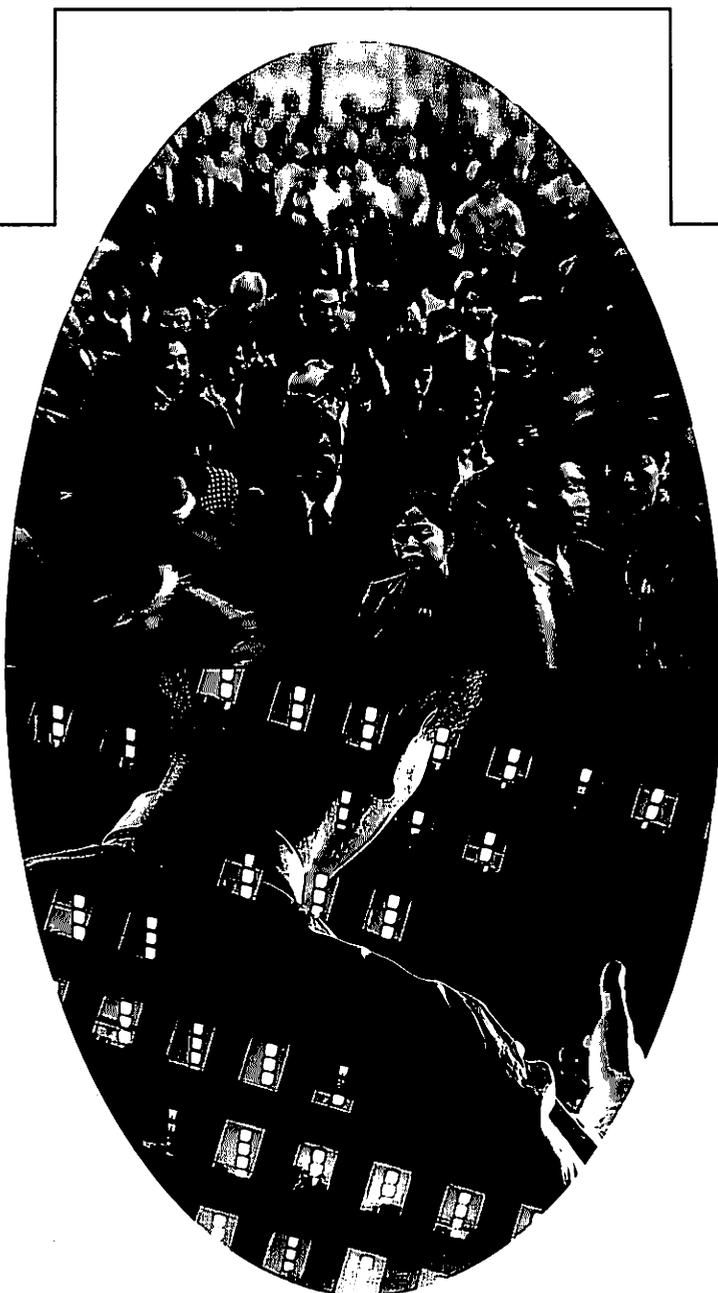
テイチク ● 高倉英信 / 田原由夏
写真 ● 三沢 弘 / 高橋 盛 / 毎日新聞情報センター

加藤哲郎

×
小池和男

×
宮田登

〈五十音〉



日本人は“勤勉”で
“働きすぎ”なのか
昔の日本人は遊び上手

近年、“勤勉で働きすぎの日本人”に対する批判が、
国際的に声高に叫ばれ、国内でも“もともと休もう”論が台頭してきている。
日本人は昔から、
働くことだけに生きがいを見出してきたのだろうか。
さらに、本当に日本人は海外から批判されているように“働きすぎ”なのだろうか。
日本人と労働について、多角的に問い直してみた。

日本の労働時間は長い？

小池 ● まず、日本人が勤勉かどうかですが、
いい点二つあって、一つは、一般に日本
は先進国並みであって、特に勤勉好きといふ
うにはみえないこと。二番目に、特に、大企業
のブルーカラーと、ホワイトカラーの中層部で
は、おそらく労働のパフォーマンスは悪くない、
むしろいいという点です。これらの点をはつき
りさせるための、同じ質問で行った丁寧な国際
比較は、私の知る限り、二つしかありません。
いちばんサンプル数が多い資料は全日本電機機
器労働組合連合会（電機労連）の二回の調査と、
パークレーのリンカーンとカーレバークが行っ
た調査。リンカーン教授は、この調査以外に今
までに行われた他の信頼できる調査も調べてい
るのですが、そのうちで、先進国の同程度の階
層の人たちを比べると、日本人の、仕事や会社
組織に対するロイヤリティは、他の国々と同

じか、やや少ない。どの調査もほとんど一致し
ています。

もう一つは、世に流布されている論の根拠の
問題です。例えば、日本の労働時間は長いとい
う。多分、日本が少し長いのは事実でしょうが、
いわれているほどではない。労働省は統計の初
歩的な誤りをしているんです。各国政府は日本
でいえば「毎月勤労統計調査」にあたるものを
もっていますが、確実な労働時間統計は製造業
のブルーカラーのものしかあり得ない。それで
みると、日本は他の国とほぼ同じか、オイルシ
ョック後は少し長くなったくらいです。その算定
方法は、国によって多少違いますが基本的には、
事業所ごとに支払い総労働時間を在籍労働者数
で割る。だから、欠勤も休暇も入ります。それ
以外の統計ではほとんど、きちんとした比較が
できない。なぜなら、大学卒のホワイトカラー
に残業代を払う国は、おそらく日本くらいです。
アメリカは職長にも払わない。だから、この層
を含んだ比較は無意味です。残業が問題になる
のは、機械によって自分の仕事が左右される職
種に限定されるんです。しかも、パートタイマ

ーなどどこまでを在籍人数として計算するかも、
大きな問題です。国によって、異なりますから。

加藤 ● その労働時間ですが、実は門外漢の私
が労働時間に興味を持ち始めたのは、北欧と日
本をデモクラシーのレベルで比較したとき、北
欧の社会への女性進出の高さや、地域コミュニ
ティの充実などと、労働時間の短さがどうもリ
ンクして思われるのではないかと思われたからで
す。すると対極に、働きすぎといわれる日本の問題
がみえてくる。

たしかに労働時間は、同じ産業部門の同じよ
うな職種労働者の比較でなければ意味がない
ので、なかなか信頼できるデータがない。それ
でも、旅をした実感とか、欧米での生活体験な
どをふまえて考えると、少なくとも、日本人の
労働時間は長いといえるように思います。

労働省の「毎月勤労統計調査」に対しては、
実は私も逆の意味で疑問をもっています。例え
ば銀行員の労働時間。労働省の統計では産業別
で金融がいちばん短い。しかし、実際にはサー
ビス残業があつて、拘束時間はずっと長いとい
う印象です。また、勤労者世帯を対象に面接で



かとう・てつろう ● 1947年岩手
県生まれ。一橋大学社会学部教
授／政治学・国家論。法学博士。
民間出版社勤務から名古屋大学
社会学部助手に。著書に「国家論の
ルネサンス」「ジャパメリカの時
代に—現代日本の社会と国家」
「戦後意識の変貌」「社会主義の
危機と民主主義の再生」「東政革
命と社会主義」「コミンテルンの
世界像」「ソ連崩壊と社会主義」
「社会と国家」など。



こいけ・かずお ● 1932年新潟県
生まれ。法政大学経営学部教授
／労働経済学・労働関係論。元・
京都大学経済研究所所長。経済
学博士（東京大学）。著書に「人
材形成の国際比較」「職場の労働
組合と参加」など多数。エコノ
ミスト賞（78年）、サントリー学
芸賞（79年）、中小企業研究奨励
賞（81年）、第4回大平正房記念
賞（88年）など受賞歴も豊富。



みやた・のぼる ● 1936年神奈川県
生まれ。筑波大学歴史人類学
系教授／民俗学・宗教学。文学
博士。著書に「ミロク信仰の研究」
「神の民俗誌」「都市民俗論の
課題」「女の霊力と家の神」「江戸
の小さな神々」「妖怪の民俗学」
「終末観の民俗学」など多数。日
本宗教学会賞（71年）受賞。

データをとる総務庁の労働力調査と、労働省のデータを比べると、年に三百時間以上、総務庁調査のほうが長い。その辺が、労働省の統計が実態を反映していないと思える根拠です。

また、統計は平均化です。日本の場合、男女の労働時間が非常に大きく違うにもかかわらず、女性に多いパートの労働時間も統計上は入っています。実は働き盛りの男性の労働時間だけをとると、労働省の統計よりもはるかに長く、それが過労死を生み出しているというのが私の印象です。

もともと

日本人は、遊び上手

加藤 ● ただ、労働時間が長いことと勤勉かどうかという問題は、同じではありません。ウィーン大学のゼップ・リンハルト教授の説では、そもそも日本人が勤勉だといわれ出したのは、極めて新しく、二十世紀に入ってからだと思います。明治初期に來日した外国人たちの記録などには、日本人は怠け者だとか、働かないという記録が多くて、勤勉だという話は出てこないというのを彼は証拠としてあげている。私の印象では、むしろ戦後の高度成長期に入って、経済のパフォーマンスがよくなってからではないでしょうか。端的に言えば、明治の殖産興業、富国強兵といわれる時代以降、労働時間が長くなった。そして戦後、他の国々との比較で著しい経済成長を達成した。その結果として、日本人は勤勉だという話になったのではないだろう



かというのが、私の仮説です。

小池 ● 日本では課長より下の人には残業代を払う。他の国々では、日本風になったら、ほぼ大卒ホワイトカラー族といえる人たちはサービスマンなんですよ。歴史的にみていくのは大変面白いです。その論議の前提の、今が長時間労働だという認識はちょっと検討する必要がありますように思います。他国の事情に対する誤解と、日本のデータに対する誤解がいくつかあってわからないところがいっぱいあるんですね。

宮田 ● 勤勉ということですが、侍がイニシアティブを握って役人になり、現在のサラリーマンにもつながっていくところがあります。しかし、江戸時代は約七割近くが農民や漁民などで、そういう伝統的な社会の中で農民がとっていた「休み日」はかなり多い。東北地方のデータで年間約八十日くらいある。基本は、合わせて二十日くらいある神様のお祭りの日です。そしてそのお祭りの前後に、若者組が主導権をとって、人間同士が遊ぶ遊興の日を設ける。祭りは二日間なのに前後を合わせて五日間くらい休むというふうです。江戸時代半ば以降、だんだんそういう形が増えていったんです。

一日の中でも朝飯前の仕事から夜業まで長時間働いていますが、合間に食事も含めて一日五回くらい休みをとって楽しく過ごしている。働くこと自体はそれほど苦にしないで、うまく休みの時間や休み日を入れてリフレッシュする生活の知恵があったんです。

加藤 ● 江戸期の侍は戦さもなくなりましたが、今日という役所勤めをしていたわけですね。たしかにお城に行くけれど、それほど長時間詰

めていない。明治期の官僚も、最初の頃は夏季には月に二十日くらい休むなど、今からは考えられない労働時間の短さです。町人には毎月一と六のつく日を休み一六休みいちろくやすみというのがあった。そうするとこれは四勤一休ですからかなり労働時間が短い。しかもそのほかに、「ハレ」という、祭りなどに関連する休みもありましたしね。

宮田 ● 一六休みもありましたが、あまり使われず、毎月一回の一日、十五日を休日にする方が多かったです。それから、二十三日とか二十



六日とかと、太陰曆に合わせて夜遊ぶ習慣もありました。町人はさかんに講をつくって皆で遊びに出かけたりしていて、江戸の伝統からいうと、明治以降の勤勉性を強調するような形は、民俗学の資料にはあまり出てきません。

小池 ● 湯治という風習がありましたね。すると農民には、相当長期のバケーションが農閑期にとれたとみていいでしょうね。そして湯治場が成立するには、ある時期に相当な需要が存在する必要があります。

宮田 ● 例えば浅草寺に残る『浅草寺日記』の中に、お坊さんたちが休暇として湯治に行くことと書いてある。ただし、休暇というのは病気になることなので、病氣だと最低三日から一週間、箱根に湯治に行って治療して帰ってくる。ですから物見遊山ではなく病氣治療のために出かけたといえます。

小池 ● 私の記憶でも、越後平野の自作農の場合ですが第二次大戦末期まで、農民は、農閑期の湯治場行きには相当の長期間をとっていました。

宮田 ● 「藪入り」というのがありました。都会に出ている奉公人が親元に帰る日で、正月十六日と盆の十六日の年二回。これだけは一斉に休む。ところが、他の日は、正月でも開けている店もあるくらいで、一斉休みとはいかない。江戸時代どころか昭和初期くらいまで、そういう形でした。農民が自然のリズムに従って働き、生活の中にならなく「休み日」を生かしていた伝統が、江戸期には町人や武士の生活にも入ってきて、適当に遊びをはさみながら、仕事をしていたんですね。

「三年寝太郎」は ワーカホリックの対極

宮田 ● 休み日との関連でいうと、「フユジの節句働き」という言葉があります。「フユジ」というのは不精進者の縮まったもので、本来、精進潔斎すべき休み日に普段の仕事をしている人を非難する言葉です。日本人の休み日は、本来神遊び、つまり神事と関連した休み方が中心で、

神事の日特別なことをすると祟りがあるというような、共同体の規制があったことがわかります。そうすると近代以後、神様のために働くという労働観が変化し、それにつれて休日観も神様と遊ぶ日ではなくなってきた。むしろ、浅草寺の日記のように、病氣になって休むという意味の休日に近くなってしまった。こうしたことは、欧米の休日の考え方と比べられるものでしょうか。

加藤 ● ホリデー、つまり聖なる日ですね。



小池 ● 私が資料をあたってわかつている範囲では十九世紀、一八三〇年代以降ですが、ブルーカーは土曜日働かなければなりませんでしたが、日曜日は神のための日でしたから、逆に休まなければならなかった。一九七〇年ころまで、イギリスではサッカーチームが日曜日にプレーできませんでしたね。

宮田 ● 江戸時代ころまでの日本でも「働きの者」という言葉は、そう頻繁に使われる言葉ではありませんでした。「勤勉」という言葉は、翻訳語



でしたね。

加藤 ● ドイツ語の「^{フライツィット}Zeitgeist」です。例えば、フランクリンの「時は金なり」という言葉と、日本の「早起きは三文の徳」という言葉なんか同じ意味だと考えていいんでしょうか。

宮田 ● 早起きというのは、朝、神参りに出かける朝参り、ということですよ。早起きして神に参って恵みを与えられる、という意味でしょう。

加藤 ● 朝早く働くという勤勉性を表わす言葉ではないわけですね。「朝飯前」というのは、働くことを指しているんじゃないか。

宮田 ● そうです。農業で、朝食前にひと仕事することです。「働く」と「休む」の関連で、昔話に「三年寝太郎」というのがあります。彼は約三年間、いわば長期休暇の状態でした。働かず、村の共同体の外にいて、しかも村人に養ってもらっている。ところが、都に課役があるとき、寝太郎が自分の役割だといって初めて働きに出た。そして、ただ寝ころがっている間に体得していた鳥や動物の声を聴くという能力を発

揮して、遂に長者の婿になって出世して村に帰ってくる——という話です。これは日常の意味

では働かなくても、自然のリズムと感応できるような暮らし方をしているという、一種の理想像でしょうかね。長期間休んだほど、いざというとき集中度が高い仕事ができる、それでバランスがとれる、という教訓話になっています。これは明らかに、現代のワーカホリックを生みだしている労働観、休日観とは異なります。

女性が家計を握っていた

宮田 ● ところで、日本の女性は昔からよく働いていたというのは知られていますが、一方よく遊んでもいました。娘、主婦、姑と三つのグループがあり、それぞれ機能は違いますが、子育てなどを中心とした社会教育を自主的に行う女の講というものがあつた。



小池 ● 文献などにはありませんね。

宮田 ● 文献には寄合いなどの、男性を中心とした政治的な集まりの記載があるだけで、こうした女性の動きは民間伝承の形で残っているのです。文献には記載されていないけれど、盛大に女の集まりが行われてきたんですね。

小池 ● そうすると家計は男性、女性のどちらが握っていたんでしょうか。

宮田 ● 民俗学的にいう「主婦権」という言葉には、神仏へのお供えをすること、「杓子権」といってしゃもじを握ること、そして「カカ座」という囲炉裏の定まった座に座するという役割が含まれ、主婦はこの三つを担いました。しゃもじを持つというのは、当時の経済は米ですから、その米を分配する、つまり財布を握っていることです。さらに「ホマチ」といって独自の一種のヘソクリも持っていました。

小池 ● けっこう女性が財布を握っていたんですね。

宮田 ● しかし財産としての相続は男性に限ら

れていました。鎌倉期には、女子が相続権をもつていた時期がありますが、江戸時代には表面的には消えている。相続できないのは、相当のダメージですね。

加藤 ● アメリカのトマス・スミスという人の本に、江戸時代の日本の農民は欧米と違ってよく働いていた、と書いてあり、その根拠としていろいろな仕事を手際よくスケジュール化する技術が日本の農民の方が進んでいた点と、しかしそれは個人としてはなく、家や村が単位だったといっています。そうすると、男性は共同体にかかわる公的な労働を担当して、実際の家計とか家にかかわる部分は女性が、分配権も含めて担当していたといえますね。

小池 ● そうすると、女性が社会進出する際のインセンティブの問題として興味深いですね。主婦に家庭内の裁量権があるなら、無理をして外で働かなくてもいいということになる。

加藤 ● ただ、家計はGNP計算に入りませんから、どうしても副次的なものにされてしま



ます。少なくとも今日では、そうみられていますね。

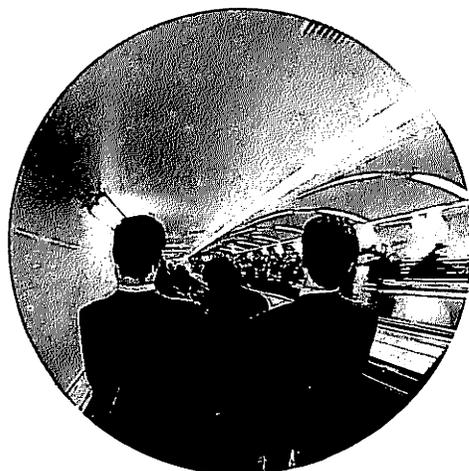
国によって異なる 査定範囲

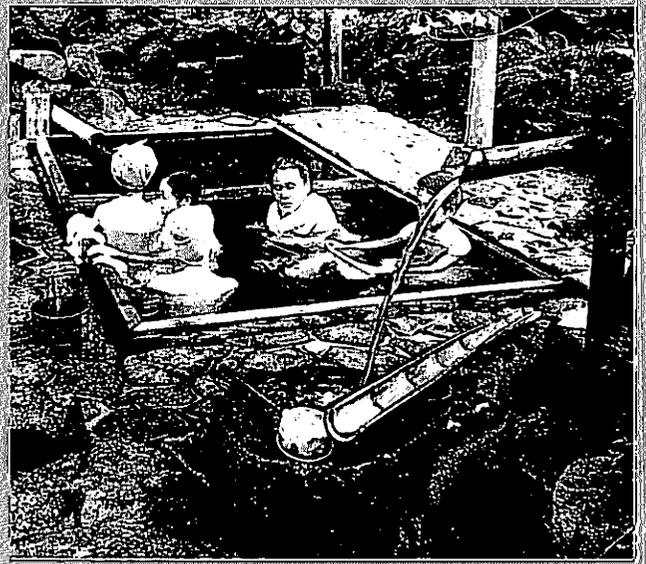
小池 ● 最初に、日本人の労働の特徴として、パフォーマンスが比較的いい、といいましたが、それはおそらく、他の国々に比較して、日本の方がインセンティブが上手につくられているからだろうと思います。例えば、大企業のブルーカラーをとると、アメリカには査定がないが、日本にはある。アメリカだけでなく、ほとんど国で、ないのです。ところが、どの国でも、だいたいホワイトカラーには査定があります。ウォール・ストリートでも新聞記者でも、大卒のホワイトカラーに残業代はつかないけれど、彼らの競争はものすごいもので、上部二割くらいに入らなければ出世できない。だから、時間

をいとわず働いています。そこに入れなかったら、出世するためには、また別の企業なりへ移って、また競争をする。しかしこれは、記録には残りません。ですから、日本のサービス残業の問題などは、よその国の実情を知らなすぎる自虐的な議論だといえます。

そしてホワイトカラーの査定では、仕事のできない人よりできる人の方が給料も上り、地位も上る。しかし欧米では日本と違って、ブルーカラーはほとんど百パーセントに近く、勤続順に昇進するんです。一見した年功序列は日本の専売ではない。しかし日本ではブルーカラーにも、ホワイトカラーと同じような競争があつて、例えば製品のミスを見分けて原因まで追究できたり、その解決策を考えたりすれば、明らかに昇進や昇給につながる。そういうシステムです。

加藤 ● すると、日本人が働くことが好きかどうかというより、働く仕組みが制度的にうまくできているということになりますね。しかし、最近の仕事中心から生活中心へ、あるいは仕事





と余暇の両立へという意識の変化が、さまざまな世論調査からわかります。そうすると、今までの良好なパフォーマンスを維持してきた日本企業のシステムが、国際競争の中で変わっていくかもしれない。小池さんは危惧という形でおっしゃっていますが、これからは、企業の側も生活要求や余暇要求に応えていかざるを得なくなるでしょうね。

働くのか 働かされるのか

小池 ● 働かされているといいますが、だまされ騙される

て働かされているのなら、こんなにいいパフォーマンスにはならない。しかもこの資格給、定期昇給、査定之三つを持つ仕組み自体は、日本独自でもなんでもなく、各国とも持っているものです。ただその適用範囲を、日本は他の国々よりちよつと広げていて、ブルーカラーの一部をも対象にしているだけです。

加藤 ● 先程紹介したトマス・スミスの論で、もう一つ、日本では、時間所有の単位が集団となっていて、残業時間も部や課ごとに割り当てられ、それが個人に配分される、というところに問題があるといわれています。

小池 ● その根拠は何でしょうかね(笑)。ただ、日本の場合の残業増率は非常に低く、新規に人を雇うより残業をしてもらった方が経営的に得になるという点が一つあります。もう一つ、用事は別になくても会社に残って何かしているだけで残業代がつくということもある。どのデータをどう使うかで、結論は違ってきますが、かりに他国の研究者の文献を使うなら、ロバート・コールの『ジャパニーズ・ブルーカラー』がしっかりしています。共同体的規制といったら、イギリスの労働組合の方が、よほど厳しいですよ。

加藤 ● 今年のILO(国際労働機関)のレーバー・レポートで、日本人はワーカホリックで過労死まで起きているという報告がでていますが、労働はストレスとの関連で扱っていますが、労働と非労働とが画然と区別できていないところで、知らないうちに肉体的限界を越えてしまうという形もあるように思います。

宮田 ● 共同体ということだと、普段それば

ど働かない人が、皆が神遊びで休んでいるときに働くことを「医者の金」といういい方もします。日頃、労働意欲が十分でない人間が、共同体のルールを破って働きすぎて、結局、身体を壊して医者にかかる、ということですね。しかし、江戸後期から幕末では、農村が変化していて、専業農家だけでなく、農民自身もいろいろな職業もするし、さまざまな職人も村に入り込んできていた。だから共同体で一致して、という形は無理になっていました。

ところで幕末に、現在の埼玉真鳩ヶ谷のあたりに富士山信仰をベースにした「不二道」という新宗教が登場してかなり優勢になった。これは、男女の役割から服装、子育てなどもすべて逆に入れて替えてみようという教えです。幕府にはかなり弾圧されますが、信者を大勢集めました。

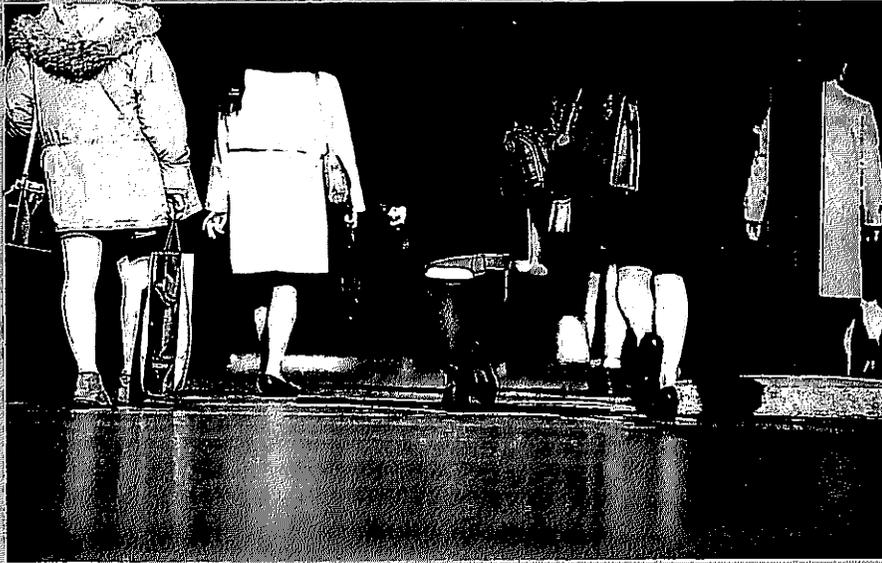
加藤 ● 現在の日本で、そうしたことが可能でしょうか。

小池 ● 私が直接、インタビュー調査で得た印象では、日本よりもタイなどでは、うまく機能するかもしれないと思いますね。タイは女性も深夜業をするし、きちつとした重要なポストについている場合が多い。タイに、昔からそういう伝統があったわけではなく、一九二〇〜三〇年代から、女性の社会進出とポジションの向上が始まったようですよ。

加藤 ● 日本の「男女雇用機会均等法」も、多分、そうした方向への一つの試みといえますね。ただ、私は、日本社会の現況をみると、男女の役割分業については、どうもあまり変わらないのではないかと、危惧しています。

多様な職種をこなす日本人

宮田 ● 江戸時代の日本の農民の六〜七割は、どうも文字を知っていて、きちんとした基礎教育を受けていたといわれます。それが近代以降に流れ込んだ新知識の咀嚼の素地になっている。



そして、農民といっても農業の他に、酒や茶づくりをしたり、畑もつくる。そもそも、いろいろな職種をこなす能力があつて、後期には、農民が武士になったり、武士が農民になったりしています。ですから、日本の城下町は、武士と町人、農民が一体化した文化を持ち、それを担ってきたんです。さらに女性の力も加えた形で、地域社会の中で、城下町のもつていたリズムを復権させるようなことができれば、現在の日本社会の状況とは少し違う形になれるのではないのでしょうか。

加藤 ● 前近代と近代のいちばん大きな相違はおそらく自然のリズムに従って暮らすか、人工的な時計で分秒まで刻まれた時間を均一的に管理するようになるかという点でしょうね。

宮田 ● 明治初期に、これまでの暦を、国家が太陽暦に変えて統一しましたね。それまでは同業の間でそれぞれに休み日を決めていたり、自然のリズムに合うやり方をしてきた。ことに、女性のもつ「月」の動きに合わせたリズムが、文化に非常に強い力を与えるものだと思います。国家レベルでなく、地域の生活レベルで考えられる「休み」というものがあつてもいい。

加藤 ● 賛成ですね。ただ現状では、通勤時間から日曜日のつき合いゴルフまで含めて、日本の平均的労働者の労働に関して費す時間は、他の国々に比べて長いと、私には思われる。とくに、働き盛りの男性では、地域コミュニティ活動や自己啓発に費す時間がほとんどないほどに、労働関連時間が生活時間を圧迫しているようにみえます。

小池 ● もう一つ、東京のサラリーマンが、他

の地域かでも、その辺は大きな差のする問題でしょうね。東京に限って言えば、これは世界に類がない、まったく特別な地域ですから、仙台とか、岡山とか、別の地域の指標でなければ、海外のデータと比較できません。

加藤 ● その点は、その通りですね。ただ、私の認識では、現代の日本人は、人間のさまざまな活動のうちで、稼ぐために働く部分のウエイトが、社会的、文化的活動や家庭生活を圧迫するまでに、非常に大きな部分を占めているのではないか。これは厳密な意味での比較ではなく、印象に近いものですが。そうすると、江戸時代の人々の持つていた暮らしのリズムから学べるものが多いのではないかと思います。近年、経済摩擦も強まっていますが、第二次世界大戦後国力を大きくするために費してきた私たちのエネルギーをもっと別の形で展開することで、国際協調もできるのではないかと思いますね。

小池 ● 日本が創造した、国際的に貢献できる文化といたら、より大勢の人に少しずつ、「競争」という原理を広め、しかも仕事の中身という点ではほんの半歩でも高めるといふことを世界に先がけてやってきたんですから、これを他の国の人々に、明快に説明するその論理性を獲得して、他の国にも納得させる、これが貢献だと思えます。たしかに、労働のパフォーマンスがいいというのは、非常に競争的な状況下で、頑張る人が多いということですから、必ずしも全員がハッピーというわけではない。ただ、折角、自国のもつているいい仕組みを、誤った自己認識でむざむざ壊すのは、ちよつと考へていてですね。

日本人のなまけ者の系譜に

再評価を

米山俊直

「サービス残業、過労死、会社人間、などという言葉が象徴するように、日本人は勤勉である、と言われてきました。果たしてそうなのでしょう？ 先生は日本経済新聞の一九八九年七月三十一日の「発言で、それは明治以降、近代国家の国造りの中で生まれた神話で、本来はなまけ者」であったといわれました。日本人本来の勤労観につきまして、ご考察ください」——というのが、編集部からの注文であった。

お引き受けしたものの、まだ時間があると思っていたら、締切が過ぎてしまつてファクスで送稿しなければならなくなつてしまった。八月中旬からヨーロッパに行き、ベルギーのブリュッセル郊外のルーバン・カトリック大学に滞在していたので、帰国してからも雑用が山積して、この始末になつたのである。

◆「農繁期と農閑期の じょうずな使い分け」

日本人は本来勤勉である、と言われてきた。

「柴刈り縄ない草鞋(わらじ)をつくり親の手を助け弟を世話し

兄弟仲よく孝行つくす

手本は二宮金次郎」

という尋常小学唱歌があるように、二宮金次郎尊徳が初等教育の中で一種の「文化英雄」として取り上げられ、子供の時から「親の手助け」をしてよく働いて、その中で「手習い読書」にはげみ、勤勉の模範としてたたえられた。全国の小学校に柴を背に負って本を読んで歩いていく姿の金次郎の銅像あるいは石像が建てられていた。戦後それが姿を消したので、井上章一がそれを追いかけて、「ノスタル

ジック・アイドル二宮金次郎」という本(一九八九年・新宿書房)を書いたりしている。報徳仕法という農村改良案を編み出して、各地でそれを実践させた、コンサルタントの草分けのような人であったが、それ以上に親孝行をする、勤勉な子供の模範として、明治の小学校教育では大きいシンボルになった。

たしかに、日本は戦前まではその八割以上が農村、厳密に言うところ農山漁村であつて、人々は体を元手にしてよく働いた。今のように機械化が進んでいなかった農業労働は、はげしくつらいものであった。しかも、水田耕作を中心とした農作業の体系は、春の田植えにいたる一連の労働の稲刈りから脱穀して米にするまでの労働を集中的にすることになつていたので、朝早くから夜遅くまで、はげしく働くことが要求された。いわゆる農繁期で

よねやま・としなお●1930年奈良県生まれ。京都大学総合人間学部国際文化学科教授/文化人類学専攻。甲南大学助教授を経て、'81年から現職。大阪・花の万博('90年)では国際陳列館館長を務める。著書に「都市と祭りの人類学」で'86年度今和次郎賞受賞。他の著書に「アフリカ学への招待」「小盆地宇宙と日本」「アフリカ農民の世界観」「日本人ことばはじめ物語」「いま、なぜ文化を問うのか」「文化人類学を学ぶ人のために」など。

あった。もちろん、そのほかにも、夏の炎天下の田の草取りなども重労働であったし、もし家畜を飼っている農家であれば、その飼料のために朝早く起きて田のあぜなどの野草を刈ってくる仕事があった。さらに農家は収入をあげるために、養蚕をしたり、果樹を育てたり、花や野菜を栽培したりして、それぞれ手間のかかる「多角経営」をしていた。このように農業を例にとると、日本人は勤勉でなければやっていけないような状態にあった、と思うようになるのは当然で、それをしてきている農民の苦労を想像して、大変だろうなと同情してしまうのである。しかし、たしかに労働は激しくつらいものであったけれども、毎日が農繁期というわけではなかったことは言うまでもない。合理的農業経営法、収入を大きくするための工夫として、一年中を農繁期にするような、多角経営が提唱されたけれども、例外的な篤農家をのぞけば、すべての農家はそのようなやり方をしたわけではなかった。それぞれの地域には年中行事として、田植えの後の休息日が決まっていて、その日にはこちそうを準備して村の神社に集まり、その年の作柄の良いことを神様に祈り、同時に仲間と共にゆっくりした骨休めをした。田の草取りは大変だけれども、日差しの強い日中は昼寝して、朝早くと夕方の涼しい時



期に仕事をすることも自由であった。そして、そのような労働の報酬あるいは結果としての、秋の収穫の喜びは、大きいものだったと言える。東北地方などの広い栽培面積を持つ地方では、一毛作なので秋からは完全な農閑期になる。人々は連れだって温泉場に湯治に行く。自炊して長逗留のできる湯治場が東北にはたくさんあった。人々がもつと現金が必要になり、出稼ぎ労働に出るようになって、このゆったりとした農耕のリズムはしだいに消えて行った。他方農業にも技術革新が進んで、昔は十アール当たり二十一日の労働が必要だといわれていた稲作も、やがて九日になり、今では平均数時間という数字になっている。その分だけ農家の兼業化が進むことになったのである。

◆「町の自営業者も同じく働き者」

ここではまず、例として農業の場合をあげたけれども、町の生活でも同じようなことが言えるだろう。例えば豆腐屋さんは早朝から豆腐を作るために家族で働かなければならない。八百屋さんは青果市場へ、魚屋さんは魚市場へ、やはり早朝から仕入れに出かけて行く。年中行事に応じて仕入れの量や質も変える工夫が必要である。朝早くからの労働は、こうした職業では不可欠の要素である。そし



で少しでも売上を上げるように、遅くまで店を開けておくことも少なくなかった。家人はもちろんのこと、行儀見習で奉公にあがった田舎から出てきた娘さんなどは、つらい毎日に耐えなければならなかった。

そこへゆくと、歌の文句ではないけども、「サラリーマンは気楽な稼業」かもしれない。さきあげた農民や自営業の人々

を別にすれば、今日の日本の勤労者の大部分がサラリーマン、いわゆる月給取りである。いまでは、日本人の多くの人がサラリーマン体制の中で生活している。職住分離によって、職場と家庭ははっきりと分離されているのが普通である。職場では人々はその技能を時間と共に雇用者にいわば売りわたし、雇用者すなわち経営者や管理者はそれに対して報酬を支払うのである。

一億総サラリーマン化といわれて久しいが、かれらは、決められた時間内に決められた手順の仕事をするのが普通である。その労働時間は、現在では週休二日制が普及してきている。そのうえに、さらにたくさんの国民の祝日が準備されていて、労働時間短縮——いわゆる時短が話題になってくる。まだまだ外国に比べると日本人は働き過ぎだ、と言われていて、政府もそれに熱心で、平均の年間二千時間の勤務を千八百時間にしようとしている。長い通勤時間に悩まされる人達も少なくないけれども、このような状況ではかつての働き中毒はもうはやらない。モーレツ・サラリーマンはしだいに姿を消しているのかもしれない。もともと、そうして生まれたほう大な余暇時間の使い方にはとまどう向きも少なくないようである。まだまだ余暇産業は発展の余地があると思われる。

◆「勤勉の対極にあつた なまけものの系譜」

二宮金次郎がお手本になって、勤勉こそが日本の美徳だという神話が作り出されたのが明治以後の近代化の過程の日本文化である。とすれば、それと反対の、なまけ者、無精者が出世をする話が、民間説話の世界には古くからあつた。

その原形のひとつは、室町時代の御伽草子にある、「物くさ太郎」の物語である。信濃の国の「物くさ太郎」は、無類の無精ものであつたが、歌の才能によって宮中に召され、さらに皇族の末裔で善光寺如来の申し子とわかり、信濃の中將という位に出世して、死後はおたがの大明神とあがめられる、という話である。

ほかにも「三年寝太郎」というような説話が各地に残っている。「棚からぼたもち」という、いわゆる「たなぼた」の期待は、庶民の間ではめずらしくない願望である。

つまり、勤勉の反対概念である怠惰、無精が、ひとつの価値として日本文化の中には存在していたことが、容易にうかがえるのである。

近代化の過程は、国民文化形成の過程でもあつた、そして西洋にプロテスタンティズムなかんずくカルヴィニズムのような禁欲と勤勉の徳をたたえ、人間の内

なる神、内在する神という自己規律によって近代資本主義が発達したのだというマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムと資本主義の精神」という説に対応して、日本にも日本的なプロテスタンティズムに当たるものがあり、それが日本の近代化、資本主義化を進めたのだという考えが育ち、そのヒーローとして幕末の社会経済コンサルタントであった二宮金次郎尊徳がたたえられることになったのだと思われる。すなわち、日本人が本来勤勉である、というのは明治の指導者が作り出した虚像であり、そうでない、怠惰で無精な日本人、反勤勉に価値を置く人間も少なくなかったのだ、ということをご指摘しておきたい。

◆「ひとつの側面で断定できない国民性」

じつはルーバン大学で私は「日本人論」について講義をしてきた。日本人はこうだ、ああだという議論が、内外で多く取り上げられているが、それは非常に断定的主観的なものが多く、論理的、科学的な根拠がないと批判されてきた。そして、青木保が『日本文化論「再考」』で検討しているように、時代に応じて日本人論の内容自体も、日本人ダメ説から日本人スバライシ説まで、さまざまなものがあることがわかっている。また、日本人に



いていわれていることは、ほかの国民、民族についても多かれ少なかれ当てはまることが多いのである。つまり、「日本人は……」という言説はそれ自体が非常に恣意的なものだということになる。「勤勉な日本人」もそのひとつの例であり、どの国の国民、民族にも、勤勉な人もいれば、ものぐさをきめこむ人もいるというべきなのである。

国民性、民族性という議論は、その点で十分に気をつけて読んでゆく必要があることはたしかにいえると思う。
山本七平は江戸時代の石田梅岩の思想に勤勉の思想のルーツがあるとみて、『勤勉の哲学』（一九七九年・PHP研究所）という本を書いた。彼は石田梅岩に加えて、

禅僧鈴木正三を対照的に取り上げ、そのルーツが禅につながるとしている。徳川時代の町民の思想が日本の勤勉さのルーツであることは、ロバート・ペラーの『日本近代化と宗教倫理（原題トクガワ・レリジョン）』もまた石門心学を取り上げて、そこに日本の近代化のルーツと見ている。それが徳川時代末の二宮金次郎を経て、明治以降の日本国民文化のエッセンスとなっていたのである。くりかえすが、この勤勉の系譜だけを日本人の特色とみなすことは決して好ましいことではない。日本人には、怠惰、無精、なまけ者の系譜もまた存在していたのである。その再評価をもっとしてもよいのではないだろうか。

国字「働」の誕生

— 肉体労働を評価した日本人

濱口富士雄

「働」は、「人」と「動」とを合わせた会意による国字である。国字が、わが国の特殊な観念を表記するために作られたのは自明のことであるが、果たして「はたらく」という「く」一般的と思われる語を表現するのに、この国字は必要であったのだろうか。

歴史的に、やまと言葉の「はたらく」は、本来「動く・動かす」といった意味しかなかった。平安末期の辞書「色葉字類抄」(十二世紀)では、「動」字にハタラクと訓をつけていた。ところが鎌倉時代の鴨長明の「方丈記」(十三世紀)にいたると、今日ふつうに理解される「仕事をやる・労働する」という意味になり、しかも長明の自筆本であると伝えられている大福光寺本では「働」字が使われ、「つねにありき、つねに働くは、養性なるべし。なんぞい

たつらに休み居らん」と、体を使い労働することの意義をきわめて積極的に称揚する。室町時代の『文明本節用集』(十五世紀)になると、「働」と「動」とを並入るとともにハタラクという訓を与えている。ここに「働」はその意味も文字も、ともに定着したのである。

鎌倉・室町時代は、武家政治が成立し発展した時代であり、庶民の働きによる生産も大いに向上し、農村での余剰は市を発達させ、職人層の拡大は座を結成するといった時代であった。こうした時代相を背景に、「働」は作字されたのである。これは表記上の問題だけでなく、わが国における勤労意識の重要な変換点なのかもしれない。

それは中国に、「働」という概念を表現する漢字がなかったのかというと、決してそうではない。「勞」「勤」がある。前漢の辞書『爾雅』に「勞は、動なり」、後漢の『説文解字』に「勤は、勞なり」とあるように、古代には同義と理解されていた。また「動も、皇御は、勞役をせむる」(論語)「子張篇疏、六世紀」と解していた。さらに『書経』「無逸篇」に「稼穡に勤勞する」、「莊子」「讓王篇」に「春には耕し種をまき、体は労働するに十分である」とあるように、農耕に勤む働くことを「勤勞」「労働」と熟語で記していた。

しかし中国では古来からおおむね「論語」に「君子は器ならず」といって特定の職能(器)を身に付けることを

評価せず、「孟子」に労働を「心を勞する」と「力を勞する」とに分け、精神労働をする者は「人を治め」また「人から養われる」ことが普遍的な道理であるとして、肉体労働を低く見る封建的な勤勞観が立てられ後世にまで影響を及ぼしつつあった。確かにこれら「勞」「勤」「勤勞」「労働」には、「骨が折れる」といったニュアンスが強く、わが『方丈記』に見られるような身体を動かす労働への評価は見受けられない。まさに国字「働」はこうした独自の勤勞観を表現する必然性の下に生まれたのであった。

ところで作家の陳舜臣さんは「日本人の差別のきびしさをあらわす和字に、「働」という字がある。中国語で「はたらく」は「労働」である。日本ではとくに動物と区別したいのか、はたらくのは人間をまたぞと、「ニンパンをつけた」(日本の中国的)と、「働」字から日本人の物の区別を些細なまでにしたがる特性を適切に指摘されたが、やはり根底には日本と中国との勤勞意識の違いが潜んでいた、と見るほうが妥当であろう。

はまぐち・ふにお ●1949年東京都生まれ。群馬県立女子大学助教授、中国古典学専攻。著書に「射経」思想の探究(共著)、「三省堂」テキスト漢和辞典(編者代表)など。

イラストレーション：中村 忠

